

創立 95 周年、年末に思う―「教学要綱」の不正 2025 年 12 月 8 日

創価高・大学 4 期 図斉修

私は、11 月 18 日に拙文 <https://share.google/gNKItN0iBMtIFf1pt> を、また、28 日に <https://share.google/khPgHR1NqRYNnddGo> を記し、皆様に「教学要綱」と 2024



年 5 月 3 日発刊の「教学部編観心本尊抄」が完全な邪義であることをご案内しました。その直後、親友中村誠氏から以下の論考を頂きました。私は一読、教学部編観心本尊抄がこれほどまでに池田先生の本当のご指導に違背する現況を、再度、皆様にお伝えするべきと決意、この拙文を記しました。

そして、思いました。昨年 12 月 8 日に実施された青年部一級教学試験の主教材が、この邪義の「観心本尊抄」であったことは、未来ある青年部に日蓮仏法の正義と池田先生の本意が伝わらなかったこととなり、私は残念、また怒りでいっぱいです。以下、中村氏の破邪顕正の論考をご高覧下さい。―

観心本尊抄に次のような御文がある。

「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり」（旧版御書, p. 247）」

ここで重要なことは、五百塵点劫という大昔は無限に近い過去ではあるが、決して無限ではなく、更にその過去があるという事実である。従って、～から～までという範囲を表す「乃至」を、現在から五百塵点劫ととると、無始という概念と整合性がつかなくなる。そこで、乃至を後ろに取って久遠本果、修行を完成させた位から、久遠名字、無限の過去に修行を始めた位までを含ませて理解するというのは正当な日興門流の解釈である。このように解釈しなければ、同御書の御文「教主釈尊は五百塵点已前の仏なり因位も又是くの如し」（旧版御書, p. 243）の「五百塵点已前」と矛盾を起こしてしまうからである。

池田先生は次のような議論を遺されている。

「大聖人は『五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏』と仰せのごとく、久遠元初に所顕の無始無終の仏を示されています。ここにいう『乃至』とは、後ろより前に向かって、つまり久遠本果の時から、久遠名字の時をのぞんで「乃至」と言われているのであります。 1/30

したがって『乃至』とは『当初（そのかみ）』の意であり、例えば『当体義抄』に『釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証所証の本理を顕し給えり』（御書, p. 513）とある『五百塵点劫の当初』にあたると拝するのであります。」（池田大作全集 24 巻, 観心本尊抄講義, p. 299-300)—と。

これは戸田先生のこの講義を踏まえてのものであることはあきらかであろう。下に引用する。

「五百塵点劫と無始は同じことになるか。 五百塵点劫遠しといえども無始よりすればはなはだ近いのである。大いなる誤りが生ずるではないか。しからば乃至とはいかに読むかというに、これは後から前に向かい乃至というので、五百塵点劫はすなわち久遠本果の時である。所顕の三身は久遠名字の時にあり、いま久遠本果実の時より久遠名字の時に向かってその中間を乃至するのである。すなわちこれは諸御抄の『五百塵点劫の当初（それ以前）』の文と同じである。」（戸田城聖全集 7 巻, 観心本尊抄講義, p. 188-189)

そして、戸田先生は次の三編の御書を引用されて議論を補強されている。

「釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証所証の本理を顕し給えり」（当体義抄, 旧版御書, p. 513)

「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」（三世諸仏総勘文教相廃立, 旧版御書, p. 568)

「寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり」（三大秘法稟承事, 旧版御書, p. 1022)

従ってあの御文の現代語訳は次のようにならざるをえない。戸田・池田先生とも全く同じ現代語訳であり、ここに師弟不二の精神を強く感じることができるのである。「我らが己心の仏界たる釈尊は、久遠元初所顕の三身にして**無始無終の古仏**である」（池田大作全集 24 巻, 観心本尊抄講義, p. 298 / 戸田城聖全集 7 巻, 観心本尊抄講義, p. 179）ところが 2024 年に発刊された「教学研鑽のために 観心本尊抄（第 2 版）」では、この解釈は無視され、現在から五百塵点劫に向かって乃至し、五百塵点劫と無始を同一視してしまっているのである。それが次の箇所になる。

一まず、最初の「しかるに、我は実に成仏してより已来」以下の文は、釈尊自身の五百塵点劫の成道という本果を明かしたものである。この文について大聖人は、「我らが己心の釈尊は、五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり」と仰せである。受持即観心によってわれわれ衆生の生命の中に現れる「我らが己心の釈尊」とは、**釈尊が成道した五百塵点劫に顕された無始無終の永遠の仏であると示されているのである。われわれの生命にある仏界は、釈尊のそれとまったく等しいのである。**（創価学会教学部編、世界広布の翼を広げて教学研鑽のために 観心本尊抄（第2版）聖教新聞社 p 164，または Kindle 版 p 131）

文章の前後から、明らかに釈迦を永遠の仏、根本の仏と密かにみなしているのは明白である。私は問いたい。ここに戸田・池田先生に繋がる師弟はあるのか、と。

そして思想的に共通しているのが、宮田幸一氏の論文である。次の宮田論文の箇所は観心本尊抄の研鑽本の解釈と全く同じである。[『本尊問答抄』について http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-3.html](http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-3.html)

—「五百塵点乃至」はその前の引用文の「我実成仏已来」を指す、すなわち「五百塵点劫」を指すと読解するのが素直な読みであると思っている。「無始の古仏」とは『法華経』を引用しているこの文脈では**久遠実成釈尊のことであると解釈するしかないだろう。**」—と。

そしてこの箇所、宮田教授は、日蓮の無始論は間違っている、自分の方が正しい、法華経の世界観はガンダムの世界に等しい等の、アカデミックな議論としては**極めて不適切な暴論**を展開している。参考のために一応ここに詳しく掲載しておこう。

—「そして重要なことは『法華経』には「無始」という用語は使われておらず、釈尊の成仏した時もたとえ話で説かれ、そのたとえ話の時間を「五百塵点劫」と後の注釈者が呼んだだけのことである。当然『法華経』の中では釈尊が成仏する以前の修行のことが書かれているから、釈尊が成仏したのは「無始」ではなく「五百塵点劫」という昔の時点である。つまり厳密に『法華経』を読むと「無始」ではなく「有始」であることは明白であり、無始に関する議論は『法華経』とは直接関係ない。

だから日蓮が「本門の十界の因果をとき頭す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて真の十界互具百界千如一念三千なるべし」と『開目抄』で述べていることも、『法華経』とは直接関係ない議論なのである。『法華経』で説かれる「五百塵点劫」も日蓮が説く「無始」の議論も、現実の時間とは無関係であるという点で、アニメのガンダムの宇宙世紀79年にジオン独立戦争が生じたというお話と、同じなのである」

(略)「「無始」に関しても、『観心本尊抄』で「寿量品に云く『然るに我実に成仏してより已来無量無辺百千万億那由他劫なり』等云云、我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所頭の三身にして無始の古仏なり、経に云く『我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり』等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり、」と述べているが、日蓮正宗では「五百塵点乃至」を「五百塵点劫よりも前に」と読み、「無始の古仏」とは久遠実成本果釈尊ではなく、久遠元初本因仏＝日蓮であると解釈している。

私は、この解釈は文脈を無視した解釈であり、「五百塵点乃至」はその前の引用文の「我実成仏已来」を指す、すなわち「五百塵点劫」を指すと読解するのが素直な読みであると思っている。(ただし学問とは無関係な信仰に基づく宗派的な読み方を否定するものではない。)「無始の古仏」とは『法華経』を引用しているこの文脈では久遠実成釈尊のことであると解釈するしかないだろう。」ーと。 引用終わり \*\*\*\*\*

むしのこぶつ【無始の古仏】久遠の仏のこと。無始の本仏ともいう。御本仏、日蓮大聖人のことをいう。無始とは始まりが無いとの意で、末法の寿量文底下種の義では久遠元初をさす。観心本尊抄に「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所頭の三身にして無始の古仏なり」(二四七頁)と述べられ、観心本尊抄文段には「我等が己心の釈尊は五百塵点の当初、名字凡夫の御時所頭の三身にして無始の古仏なり云云。これ即ち久遠元初の自受用身、報中論三の無作三身なり」(文段集四九〇頁)とあるように、三身相即の久遠元初の自受用報身如来、御本仏、日蓮大聖人が無始の古仏となる。

(私見) 左は、池田先生が監修の仏教哲学大辞典第三版の「**無始の古仏**」＝日蓮大聖人です。それに反し、教学部編観心本尊抄(第2版)p164には「釈尊」と明記です。この池田先生のご指導に違背した書が、昨年12月8日の青年部一級教学試験で主教材にされたのです。これは許せません！

上記中村誠氏の論考は非常に重要な点を指摘されたと拝します！宮田幸一氏が「教学要綱」を書いたと自認した通り、教学部編観心本尊抄と宮田氏の論文の三つの底意は同じ釈迦本仏論です。



上記、仏教哲学大辞典の解説中に「**報中論三**」とあり、以下の意味です。

ほうちゅうろんさん【報中論三】 報身（自受用報身）を中心に三身（法身・報身・応身）を論ずること。正在報身ともいう。法華文句卷九下に「此の品の詮量は、通じて三身を明かす。若し別意に従わば、正しく報身に在り」（天正三十四卷一二九頁）とある。仏身といっても現実には一身であるが、観点を変えれば三身に分けて考えられる。爾前経では三身が各別であるが、法華経如来寿量品第十六に至って仏の長寿が明かされ、応仏昇進の自受用身と明かされた。そして爾前の三身が整足されて、一身即三身、三身即一身であり、久遠本有常住の三身具足の釈迦如来が説かれた。この場合、報身を要として三身を説くので報中論三という。しかし、これも五百塵点劫における垂迹化他第一番成道の仏身であるから、まだ常住の体そのものではなく、本有無作の三身、久遠元初の自受用報身如来（日蓮大聖人）の出現がなければ、常住の体は明らかとはならない。依義判文抄に「久遠元初の自受用報身、報中論三の無作三身なり。此の無作三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」（六巻抄一三一頁）とある。【文段集】 観心本尊抄文段（五三七頁）

また、「**無始の古仏**」は「**無始の本仏**」とも言い、ご参考下さい。

むしのほんぶつ【無始の本仏】 久遠元初の仏のこと。百六箇抄に「自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱・益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり」（八六三頁）と述べられ、日蓮大聖人こそ本因妙の教主であり、久遠元初の自受用身であることが明かされている。また諸法実相抄に「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」（一三五八頁）と述べられて、御義口伝には「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり」（七六六頁）と明かされている。五濁惡世の末法に出現され、あらゆる大難をしのばれて三大秘法の南無妙法蓮華経の弘通のため、生涯三類の強敵と戦われた日蓮大聖人は、その内証は久遠元初の無作三身如来であり、無始の本仏であられる。御義口伝には「如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり……されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」（七五二頁）と述べられている。【文段集】 観心本尊抄文段（四九〇頁）

以下、「**無始の古仏**」について、池田先生のご指導です。

「**観心本尊抄**」講義 **無始の古仏** (池田大作全集第 24 卷)

**仏も菩薩も我が生命に厳然**

寿量品の「然我実成仏……」の文は、五百塵点劫の成道を明かしたものでありますが、大聖人は「五百塵点乃至所顕の三身にして**無始の古仏**」と仰せのごとく、久遠元初に所顕の**無始無終の仏**を示されております。ここにいう「乃至」とは、後より前に向かって、つまり久遠本果の時から、久遠名字の時をのぞんで「乃至」と言われているのであります。したがって「乃至」とは「当初」の意であり、例えば「当体義抄」に「釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証所証の本理を顕し給えり」とある「五百塵点劫の当初」にあたると拝するのであります。

また日寛上人の文段によると「我実成仏已来」は、通じて三身を明かしており、我は即無作の法身、成仏は即無作の報身、已来は即無作の応身となります。次に「我本行菩薩道」の文は、因位の修行を明かしたものであり、ここでは本因の**久遠元初の無始の九界**をあらわしております。

**無始の古仏** 「法華經の智慧」**從地涌出品**(池田大作全集第 29-31 卷)

**法華經は一切衆生の己心のドラマ**

**池田** 大聖人は「観心本尊抄」で、「妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功德は骨髓に非ずや」、「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして**無始の古仏**なり」、「上行・無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり」等と仰せられている。

**遠藤** 法華經のドラマは、一切の人々の生命のドラマなのですね。そうしますと、大聖人の法華經一御本尊も同様でしょうか。

**池田** 大聖人は虚空会という法華經の舞台を用いてご自身の「永遠の自己自身」を御本尊として顕されたのです。大聖人の「永遠の自己自身」とは、言うまでもなく「南無妙法蓮華經」です。御本尊の中央に「南無妙法蓮華經日蓮」とお認めの通りです。

**無始の古仏** 講義「方便品・寿量品」(池田大作全集第 35 卷)

**五百塵点劫は始成の成仏觀を打破**

大聖人は「観心本尊抄」で、妙法を受持するわれらの「己心の釈尊」は、「**無始の古仏**」であると仰せです（御書二四七ページ）。この文底の趣旨を明らかにしたのが「久遠元初」です。「久遠元初」とは、生命の本源、大宇宙の本源という意味です。その本源の生命こそ久遠元初自受用身如来の生命であり、即南無妙法蓮華經です。「久遠とは南無妙法蓮華經なり」と仰せです。

戸田先生は言われた。「日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのであります。これを久遠元初といいます。始めもなければ終わりもありません。大宇宙それ自体が大生命体であります。(中略) 大宇宙ですから、始めもなければ終わりもないのであります。このままの地球だけなら、始めも終わりもあるのであります(『戸田城聖全集』5)と。

題目を流布し御本尊を建立 古仏「諸法実相抄」講義(池田大作全集第24巻)

日蓮・末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗ひろめ、つくりあらはし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門宝塔品の時・涌出し給ふ多宝仏・涌出品の時・出現し給ふ地涌の菩薩等を先作り顕はし奉る事、予が分齊にはいみじき事なり、日蓮をこそ・にくむとも内証には・いかが及ぼん

(中略) 今この文に「本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門宝塔品の時・涌出し給ふ多宝仏」うんぬんとある御本尊の御図顕の持つ意味を知らなくてはなりません。釈迦、多宝、更に、久遠元初の無作三身如来である南無妙法蓮華經という”仏”の生命をあらわすためには、御自身の内に、その”仏”の生命がなくてはならない。事実、日蓮大聖人御自身「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」と仰せられているのであります。人法一箇の御本仏であるがゆえに、人法体一の御本尊を御図顕されたのであります。そこに、大聖人の「内証一内なる覚り」がある。

\*\*\*\*\*

私は、2018年版と2024年版に掲載された五重三段の全体図を見比べました。(9頁に掲示)そして、それを中村氏に連絡したところ、以下の教示を頂きました。—「文底下種三段」の図を p230(下記)を載せたのは素晴らしいことで、こちらは一念三千が三種類存在することが明かされており、正しいですが、池田先生監修を謳う教学要綱の次の箇所と矛盾が生じます。こちらは明らかに二種類の一念三千しかありません。このあたりの今の教学は混乱しています。—と、そして、(「教学要綱」p.111-112)の以下、引用をされました。

「(五)「まことの一念三千」

「開目抄」には、「迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顕本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるににたり」と述べ、久遠実身が説かれた本門に至らなければ、一念三千が完全には説かれたことにはならないと指摘されている。一念三千が完全には説かれたことにはならないと指摘されている。

如来寿量品第十六で、久遠実身が示されたことで、釈尊に久遠以来、仏界が具わっていることが明かされた。そして、「我は本菩薩の道を行じて」と説かれるように、その久遠の仏身にも菩薩界を代表とする九界が具わることが示された。ここに、無始無終にわたる十界互具が明示されたのである。

そのことを「開目抄」には、「本門にいたりて（中略）本門の十界の因果をとき顕す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし」と述べられている。

大聖人は、天台大師が「摩訶止観」で説示した一念三千の観法と、一念三千の観法によって覚智し体得した究極の法を、どちらも一念三千と呼んだが、その意義を明確に立て分けられた。そして、後者を「まことの一念三千」「真の十界互具・百界千如・一念三千」と位置づけ、それは「法華経」本門に示されているとされたのである。

「観心本尊抄」には、「像法の中・末に、観音・薬王、南岳・天台等と示現し出現して、迹門をもって面となし本門をもって裏となして、百界千如・一念三千その義を尽くせり。ただ理具のみを論じて、事行の南無妙法蓮華経の五字ならびに本門の本尊、いまだ広くこれを行わず」と述べ、『法華経』迹門を中心に一念三千を構築した天台大師は、真理の枠組みを理論的に論じるにとどまったとして、御本尊に「南無妙法蓮華経」を唱えることが一念三千を具現化する実践であることを明かされている。」引用終わり一と。

\*\*\*\*\*

私は、上記の一念三千、又、五重三段について 2018 年版観心本尊抄の記述と 2024 年版を再読しました、その結果、2018 年版 216、217、224 頁には一「一品二半」といっても、日蓮大聖人が改めて立て直された一品二半である。(中略)

正宗分の一品二半によって明かされる**寿量文底の肝心たる妙法**のみが、衆成仏の要法である。三世の諸仏の一切の経典はすべて、この妙法をあらわすための序分となるのである。(中略)末法に流通すべき法は、**寿量文底の下種益たる題目の五字、すなわち南無妙法蓮華経**である。一と記されていますが、この五重三段の最終結論が 2024 版では削除されていました。また、以下の図の相違も発見しました。



以下は2018年版と、2024年版の五重三段の全体図の比較です。

再往別の三段			一往総の三段			序 分
文底下種三段 もん底下しゅさん	本門脱益三段 ほんもんだつえきさん	迹門熟益三段 しごもんじゅえきさん	法華十卷三段 ほふけじふせんさん	一代一經三段 いちだいいつきやうさん	爾前經 にぜんきやう	
一切の仏の無数の經典	從地涌出品の前半	無量義經と法華經序品	無量義經と法華經序品	法華經と開結の10卷	正 宗 分	流 通 分
内証の壽量品 （日蓮大聖人が立てた一品二半、壽量文底下種の南無妙法蓮華經）	一品二半（從地涌出品の後半、如來壽量品、分別功德品の前半）	方便品、人記品	方便品、分別功德品の前半			
一切の仏の無数の經典	分別功德品の後半、普賢經	法師品、安樂行品	分別功德品の後半、普賢經	涅槃經		

2018年版

第五重	第四重	第三重	第二重	第一重	序分
文底下種三段 未法の下種三段	本門脱益三段	迹門熟益三段	法華十卷三段	一代一經三段	爾前經
一切の仏の無数の經典	從地涌出品の前半	無量義經と法華經序品	無量義經と法華經序品		
華經	末法のための「一品二半一日」 蓮大聖人が立てた一品二半で、 法華經の肝心である南無妙法蓮 華經	一品二半（從地涌出品の後半、 如來壽量品、分別功德品の前半）	方便品、人記品	法華經と開結の10卷	正宗分
無数の經典	分別功德品の後半、普賢經	法師品、安樂行品	分別功德品の後半、普賢經	涅槃經	流通分

（壽量文底下種、表記あり）

（ただの法華經の肝心）

（中村談続き）「文底下種三段」の図と比較させる必要があるのが、この箇所です。私が見た中でも、最も悪質な改ざんです。是非、第一版と第二版の両書を手にとって確認してください。これは本当にえげつなくて、必ず今回掲載する論文にのせる必要があると感じましたので、ここに写します。

第二版 妙法受持の生命

『妙覺の釈尊』とは、究極の覺りを得た仏としての釈尊のことである。この究極の仏身は、妙法と一体であると拝することができる」（第2版 p.162 Kindle 版 p.130）実は同書の第一版も同じ箇所があるが、それは次のようになっています。

第一版 妙法受持の生命は自受用身の仏

『妙覺の釈尊』とは、究極の覺りを得た仏としての釈尊のことである。この究極の仏身は、妙法と一体であり、妙法の功德を自在に受け用いる自受用身であると拝することができる」（同書、第1版、p. 162） 9/30

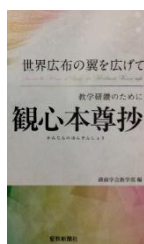
第一版のタイトル、「妙法受持の生命は自受用身の仏」が改ざんされ、「妙法受持の生命」となっている。そして悪質なのは、「この究極の仏身は、妙法と一体であり、妙法の功德を自在に受け用いる自受用身であると拝することができる」という文章を改ざんし、「この究極の仏身は、妙法と一体であると拝することができる」ようにするに、妙法と一体の仏が自受用身（大聖人）から釈尊にこっそりと変えられているということです。

これだと、「文底下種三段」に属する一念三千が全て釈迦に属する一念三千になってしまい、今までの教学体系が根本から覆ってしまうということです。それならば大聖人の一念三千は「法華経本門を中心に立てられた法門」となり、理屈はまさにそうなのですが、厳密にいうならこう表現するのは間違いです。一と。

\*\*\*\*\*

また、新たに、中村氏は一そして極めて問題なのが、図斉氏がみつけた記載「釈尊と等しい仏の境涯を（大聖人が）開き顕された」（同書, p.167）である。（次頁に掲載、図斉記）これだと題目に属する一念三千も釈迦の所有物となってしまう。釈迦が題目と一体であるとする同書の記述、これが一番わかりやすい邪義で釈迦本佛論を裏付けるものである。一と。

私（図斉）は、その箇所を 2018 年版の同頁でも確認。さらに 2018 年版にあった日寛上人の記述「自受用身」について 2024 年版では削除であることを発見しました。ただし、162.163.164 を削除しても、肝心の 168 頁はそのままの文体にせざるを得ず、2024 年版では、日蓮大聖人を釈尊に変えるデタラメ！ 酷い！の一言。以下、その箇所です。



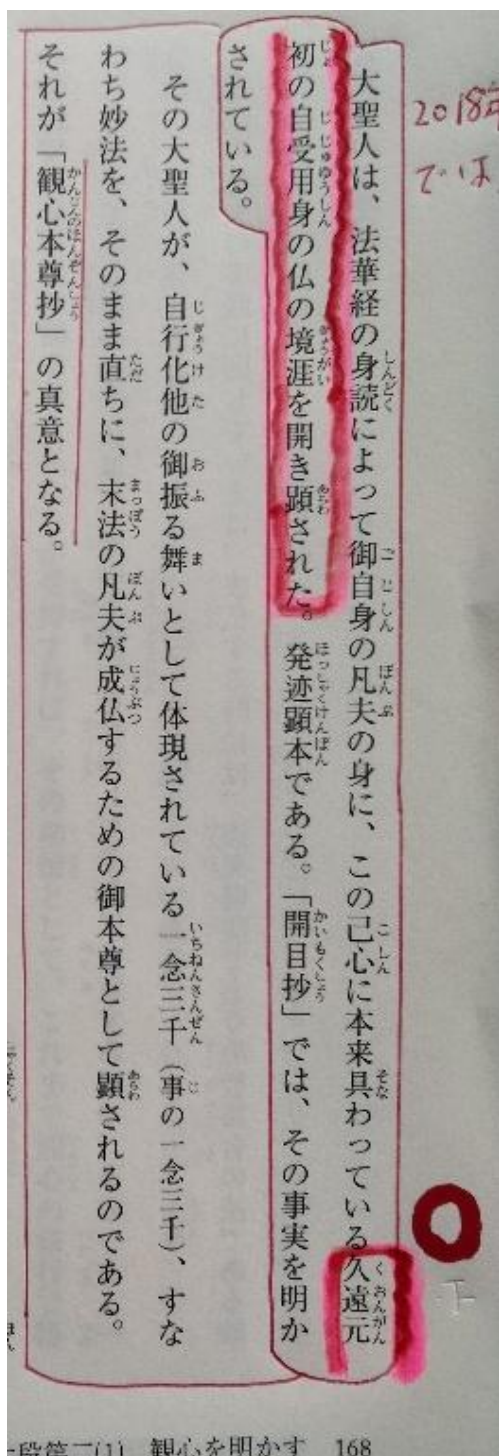
教育部編観心本尊抄の記述で一番酷い転向、邪義化を発見しました。

日蓮大聖人=久遠元初の自受用身→釈尊に、変更！

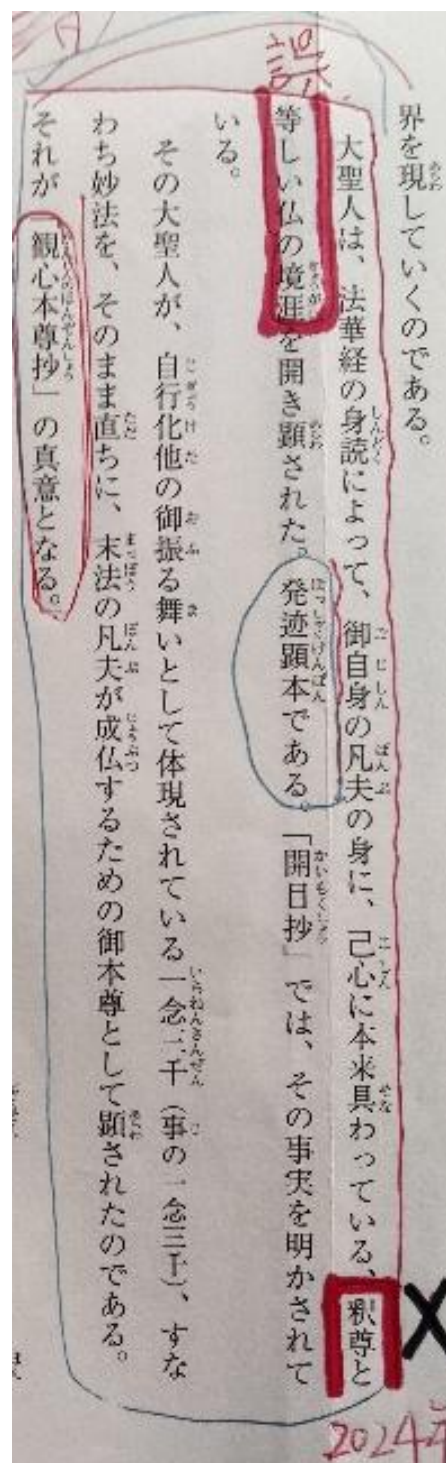
2018年版



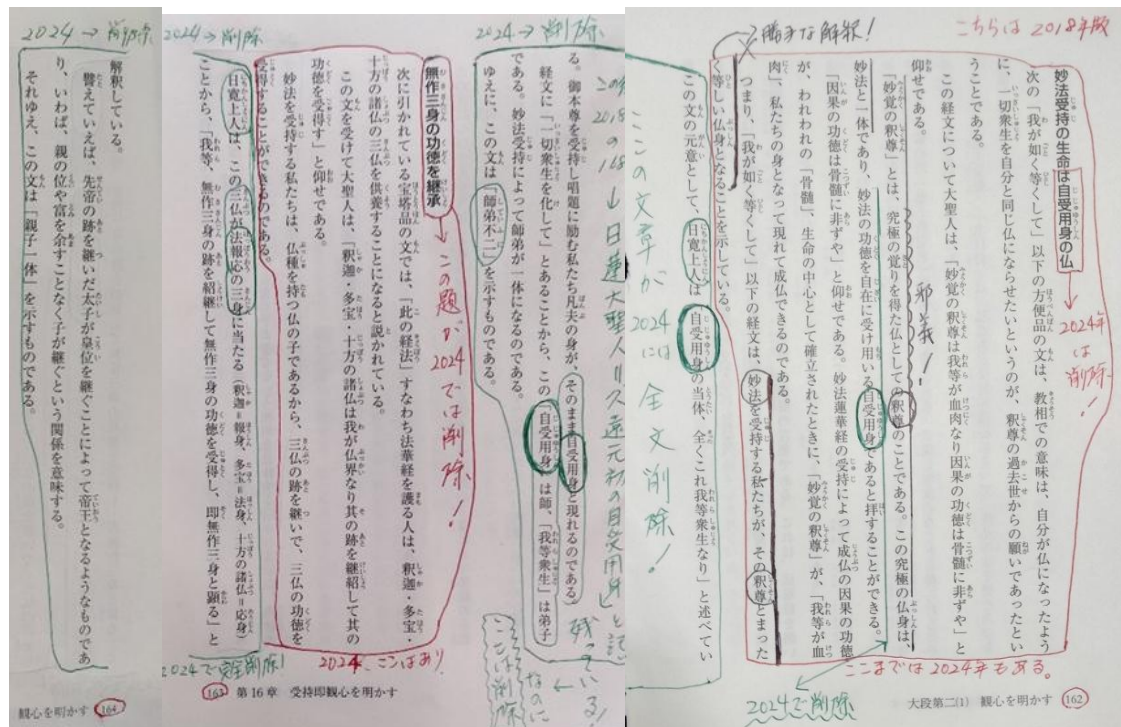
2024年版



11/30







(中村氏談続き) それならば大聖人の一念三千は「法華經本門を中心に立てられた法門」となり、理屈はまさにそうなのですが、厳密にいうならこう表現するのは間違いです。

御存知のように、天台の法華經＝文上の方便品と寿量品、しかし、大聖人の法華經＝文底の方便品と寿量品でなければならない。これが先ほどの観心本尊抄の御文の意味です。

そもそも迹門の一念三千と本門の一念三千には天地の差があるはずなのに、なぜこれが「竹膜」の差になってしまうのか。それは、大聖人の一念三千の御本尊と比較した場合、文上の迹門と本門の一念三千の差はわずかなものになってしまうというのが、日寛上人の解釈であり、極めて鋭いものです。

新版の観心本尊抄の解釈では、当然この矛盾は説明しきれず、崩壊してしまうということがいえます。一念三千の邪義が一番の問題で、根本の本尊が変わってきてしまいます。一と。

(私見) 何と、2018年版では「竹膜を隔つ」について下記詳述ありです！ 版では以下文面が完全削除！正に釈迦仏法への転向！です。 12/30



B10

た、三大秘法の南無妙法蓮華經。天台教學における「一念三千の理」と事は色相莊嚴の仏に即したものであり、機根の劣った凡夫である末法の衆生にとっては、いずれも結局は理論上の枠組みとしての「理」にとどまる。凡夫が事実の上で成仏できる法は、大聖人が名字即の凡夫である御自身の振る舞いの上に体现して説き示された三大秘法の南無妙法蓮華經である。

☆ ②日蓮仏法における事の一念三千。日蓮大聖人が御自身の振る舞いの上に体现して説き示される事の一念三千。理の一念三千に対する語。ひとくちに事の一念三千といっても、天台教學における事の一念三千と日蓮仏法における事の一念三千があり、両者は異なる。

①天台教學における事の一念三千。法華經本門の如來壽量品第16では、久遠実成が明かされ、久遠の仏の本果が示されるとともに、その本因としての菩薩道も示され、本因と本果の常住が明かされた。さらに、久遠の本仏が、九界の衆生の住む娑婆世界の上に現れるという娑婆即寂光が説かれ、真実の国土世間とその常住が明かされた。これによって、一念三千を構成するすべての要素が完備した。これは仏の振る舞いの上に事実として現れている一念三千である。

B209

（参考）  
【理の一念三千】法華經迹門において理の上で示された一念三千のこと。法華經迹門では、諸法実相・十如是、開示悟入の四仏知見が明かされて、開三顯一と惡人成仏・女人成仏が説かれたことにより、十界互具・百界千如が確立した。このことによつて、一念三千の理論的な枠組みがほぼ整った。しかし、振る舞いの上に事実として体现されたわけではなく、理の上で示されたにとどまる。

【事の一念三千】理の一念三千に対する語。ひとくちに事の一念三千といっても、天台教學における事の一念三千と日蓮仏法における事の一念三千があり、両者は異なる。

2018年版 B208

なお、「竹膜を隔つ」との文について、日寛上人は、この後に明かされていく文底下種の教えの議論を先取りして、「文底と比較して、そこから振り返つて本門と迹門について論じる」ものと位置づけている。具体的には、文底の真の事の一念三千からみれば、本門の事の一念三千と迹門の理の一念三千とは、天地雲泥の差といつても、竹膜による隔たりのように、わずかな差であると示されている。

（私見）中村氏の論究は鋭く、まさに正論です。即ち、教學部編觀心本尊抄は日蓮仏法の種脱相對としての「本面迹裏」までは示さず文上止まり、文底ではないのです！「本面迹裏」が日蓮仏法の究極なのです！

池田先生がご監修の「仏教哲学大辞典第三版」にも、下記、明確なご指導です！

ちくまくをへだつ【竹膜を隔つ】 比較する両者の差が僅少であること。竹膜とは竹の中にある極めて薄い膜のこと。観心本尊抄に「其の教主を論ずれば始成正覺の積尊に非ず所説の法門も亦天地の如し十界久遠の上に国土世間既に顯われ一念三千殆んど竹膜を隔つ」(二四九頁)と述べられている。この御文を釈して大石寺第二十六世日寛は文底秘沈抄に「所謂、彼は本無今有の百界千如、此れは本有常住の一念三千なる故に所説の法門天地の如きなり。二には重ねて文底に望みて還って本迹を判ず。所謂、本迹の異なり実に天地の如しと雖も、若し文底独一本門真の事の一念三千に望みて還って彼の本迹二門の事理の一念三千を見る則は、只竹膜を隔つるなり云云。譬えば直ちに一尺を以て一丈に望むる則は、長短大いに異なれども、若し十丈に望みて而も還って一尺一丈を見る則は、只是れ少異と成るが如し」(六卷抄八四頁)としている。すなわち、法華經の迹門と本門の一念三千の相違は天地の隔たりがあるが、文底下種独一本門の一念三千に相對するならばその差はごくわずかであるとの意。

ほんめんしゃくり【本面迹裏】 本門を面にして迹門を裏にすること。迹面本裏(迹表本裏)に對する語。天台大師は法華經迹門に従って理の一念三千を説いたので迹面本裏というのに對して、日蓮大聖人は、法華經本門寿量品文底秘沈の妙法である事の一念三千を説かれたので本面迹裏という。天台大師における本迹は法華經の本門と迹門であるが、大聖人における本門とは独一本門をいい、迹門とは文上の法華經の本迹二門をいう。御義口伝に「彼は迹表本裏・此れは本面迹裏・然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す」(七五三頁)と述べられている。また観心本尊抄文段には「諸門流の意は彼の迹面本裏を反転してこれを用ゆるなり云云。若し当流の意は、本迹の名は反転してこれを用ゆ。その本迹の体は彼此永異なり。謂く、彼は前十四品を迹面と為し、後の十四品を本裏と為す。此れは迹本二門を通じて迹裏と為し、文底下種の妙法を本面と為すなり。故に台當兩家の意、天地水火なり」(文段集五四四頁)とある。

こちらも、ご参考下さい。

しやくめんほんり【迹面本裏】 法華經の迹門を表にし、本門を裏にして百界千如・一念三千の義を説いたこと。天台大師の説いた理の一念三千の法理をいう。これを迹面本裏とも迹表本裏ともいう。摩訶止観卷五上には一念三千を明かして「夫れ一心に十法界を具す。一法界に又た十法界を具すれば、百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界に即ち三千種の世間を具す。此の三千、一念の心に在り」(天正四十六卷五四頁)とある。妙楽大師は金剛鐺に摩訶止観の一念三千の出処を法華經方便品の十如实相の文とし「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土」(同四十六卷七八五頁)と説いている。身は正報で衆生世間・五陰世間の二千、土は依報で国土世間の一千をあらわす。正報の成道は爾前・迹門の諸経でも説くが、依報の娑婆世界が即寂光土(仏の本国土)と明かす教えは本門のみである。すなわち、十如是の文によって一念三千を立てるといつても、あくまで国土世間の明かされた本門(如来寿量品第十六の「我常在此娑婆世界説法教化」の文をさす)の義に基づいて迹門の文を判ずる(依義判文)がゆえである。故に十章抄には「一念三千の出処は略開三の十如实相なれども義分は本門に限る」(一二七四頁)

と述べられ、観心本尊抄に「像法の中末に観音・薬王・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり」(二五三頁)と説かれている。御義口伝には「彼は迹表本裏・此れは本面迹裏・然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり」(七五三頁)と説かれている。ここで「彼」とは南岳大師、天台大師等の迹化の菩薩をさし、「此れ」は日蓮大聖人及びその門下をいい、「当品」とは法華經本門寿量品であり、天台大師の迹表本裏を破折されている。また大聖人の法門は法華經本門を表にはするが再往は文上脱益の寿量品ではなく、文底下種・三大秘法の南無妙法蓮華經を立てるのである。末法相应抄には「本尊抄に云く、南岳・天台は迹面本裏の一念三千其の義を尽くすと雖も、但理具を論じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず」(六卷抄一七四頁)とある。【文段集】 観心本尊抄文段(五四四頁)

さらに、中村氏の論究は鋭く、2024 年版 162 頁、(Kindle 版 p130) の一節、  
—「『妙覚の釈尊』とは、究極の覺りを得た仏としての釈尊のことである。この究極の仏身は、妙法と一体であると拝することができる」—について、以下頂きました。

—これは題目即大聖人であるとした戸田・池田先生の教えに真っ向から背くものとなる。「人法一箇とは、仏法の大眼目であり、正邪の判別はこれにある。南無妙法蓮華經即日蓮大聖人であるにもかかわらず、邪宗では、南無妙法蓮華經の法を立て、久遠実成の釈迦を人に立てている。人法のそろわぬことは大問題である」(『戸田城聖全集』第4巻 p.67・『人間革命』第7巻 p.189 なお余談だが、池田先生が表に出られなくなった 2010 年以降の人間革命 7 巻では密かにこの箇所が改ざんされて削除されている。

結論から先にいえば、題目を釈迦の所有物とし、題目の一念三千が釈迦に属するものであるとするのは誤りである。その証拠は次の御文にある。「本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し」(観心本尊抄)

脇士とはあくまでも本尊を補佐する役割をするものであり、本尊それ自体ではない。従って、脇士に過ぎない釈尊の一念三千が、一念三千の仏種である題目と一体になることは理論上矛盾しているのである。

教学要綱に次のような記述があり、多くの問題を含むので引用しよう。—

妙法蓮華經の左右に釈迦と多宝仏を配したこの本尊は、『法華經』八年の説法のうち八品のみに限ると述べられているので、虚空会のうち、地涌の菩薩への付属に関わる從地涌出品第十五から囑累品第二十二までの八品に焦点が絞られたものであることがわかる。ゆえに、直前の文に「その本尊の為体」として示された「釈尊の脇士たる上行等の四菩薩」の存在が重要となる。一方、正法・像法時代に造られたり描かれたりした釈尊の仏像や画(絵)像などは、迦葉、阿難や文殊菩薩・普賢菩薩等を脇士とするものであり、小乗・権大乘・『涅槃經』・『法華經』迹門等における釈尊に過ぎない。それに対して、「かくのごとき本尊は」として示された文字曼荼羅の御本尊が正法・像法時代の釈迦像よりも遥かに優れた本尊であることを明らかにするために、それらの釈尊よりも優れた仏格(仏の位)を持つ「寿量の仏」について述べられている。大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は『法華經』本門寿量品における釈尊、すなわち『寿量の仏』である。



さらに、その『寿量の仏』そのものが、主題の「南無妙法蓮華經」の脇士に位置づけられている。これは、「南無妙法蓮華經」こそがすべての仏を生み出した能生として、根本の本尊たるべきことを示している。したがって、先の文の趣旨は、「寿量の仏」そのものを本尊とするのではなく、「寿量の仏」が多宝仏・四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とすることにある。（教学要綱, p. 78-79)—と。

（中村談続き）脇士に四菩薩が登場することで本門の本尊を表すというのはその通りであるが、これは二番目の一念三千の法門である法華經本門の一念三千であり、文底の一念三千ではない。そして、寿量の仏である釈尊が脇士となるのであれば、それはもはや釈迦仏法ではない。釈迦は脇士だけど本尊の一部、本尊の一部だから脇士というのは、自分の都合に合わせて御書を解釈して矛盾をごまかすための詭弁的なものであり、ここで自己矛盾して崩壊しているのである。

御書には脇士とは次のようなニュアンスで説かれる。「大日如来は宝塔品の多宝如来の左右の脇士なり」（法華取要抄）。即ち、大日如来は多宝仏の脇士に過ぎず、大日經も大日如来も単なる補佐役に過ぎず、法華經が出現したからには役に立たない經典と仏という意味になる。同様に釈迦が題目の脇士になるのであれば、もはや釈迦も法華經も末法においては役に立たない教えとなるのは明白である。「今末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし、但南無妙法蓮華經なるべし」（上野殿御返事）。「文底の南無妙法蓮華經が出現した以上、法華經の本迹は、ともに捨てるべきことは論をまたない」（『人間革命』第9巻、小樽問答, p. 136）

従って、釈迦が題目の脇士となった以上は、法華經も釈迦も末法においては役に立たない存在でしかない。観心本尊抄には「一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裹み末代幼稚の頸に懸けさしめ給う」とあるが、本尊の補助にすぎない脇士の一念三千が、題目の内に包まれた一念三千であることはありえないであろう。

又、観心本尊抄には「一念三千殆んど竹膜を隔つ」とあり、これは様々な解釈を生んでいるが、戸田先生によれば、これは迹門と本門の一念三千は大きな差があるが、文底の一念三千と比較した場合、その巨大な差はわずかなものになってしまう、という意味合いが込められているということである。（戸田城聖全集7巻、観心本尊抄講義, p. 245-246）。

例えば、東京からニューヨークは極めて離れているが、東京からアルファケンタウリ星の距離を考えた場合、目と鼻の先程度しかないという意味なのである。本門の一念三千と文底の一念三千が共に釈迦に属するものであるとするならば、なぜこのような巨大な差が生まれるのかが説明が不可能になる。この矛盾を説明するヒントが、日興門流の御本尊に書写された讃嘆文にある。有供養者福過十号である。この意味は法蓮抄に次のように説かれる。

「是れ程に貴き教主釈尊を一時二時ならず一日二日ならず一劫が間掌を合せ両眼を仏の御顔にあて頭を低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴して水ををもひ飢えて食を思うがごとく間無く供養し奉る功德よりも戯論に一言継母の継子をほむるが如く心ざしなくとも末代の法華經の行者を讃め供養せん功德は彼の三業相應の信心にて一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給いて候、これを妙樂大師は福過十号とは書れて候なり、十号と申すは仏の十の御名なり十号を供養せんよりも末代の法華經の行者を供養せん功德は勝るとかかれたり」

即ち、釈迦を供養するよりも大聖人を供養する功德は、百千万億倍優れると大聖人は仰せなのである。本門と迹門の一念三千の差は確かに膨大ではあるが、大聖人の一念三千と比較した場合比べ物にならないということがいえるのである。池田先生は次のような講義を遺されている。なおこれらは、池田先生独自の御書の解釈であり、宗門の神話などではないのは、先ほど引用した法蓮抄の御文より明白である。そのような言を吐く者は単なる詭弁使いである。

「同じ自受用身でも、『久遠元初の自受用身』とは、まったくスケールが違う。一方は個人性を引きずった仏(釈尊)、一方は全宇宙を体とする仏(大聖人)です。」(『法華經の智慧』第5巻 p.284) 「日蓮大聖人は、釈尊よりも百千万億倍すぐれた御本仏である。大聖人に相対すれば、(釈尊は)迹仏である。釈尊は太陽の光に照らされて、ささやかな光を放つ、月の如き存在なのである」(『御義口伝講義』上 p.770)

「大聖人は仏であらせられるのである。しかも、その位は釈迦等の到底及ぶ分際ではない。末法ご出現の御本仏であり、釈迦・天台・伝教等も願求していたことは經文に明らかである。これを知らずして、大菩薩であるとか、偉人であるとか、勇ましい坊さんくらいに考えていることは、見当はずれもはなはだしいのである。

ちょうどダイヤモンドをガラス玉ぐらいにほめたり、国王の威力を泥棒の親分ぐらいに恐れ敬うようなもので、敬っているように思っているが実はかえって下しているのである。（『折伏経典』池田大作監修 p.316）

戸田先生も次のような講義を遺しておられた。「いまは大御本尊の両脇におしたためになられておりますが、妙楽がいわく「若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること有る者は福十号に過ぐ」と。十号とは仏のことです。この仏は、釈迦仏法の仏です。大聖人の御本尊様の意味ではないのです。われわれがよく仏様だ仏様だと聞いているあの仏様に勝ること、たいへんなものだという」（戸田城聖全集 7 巻, 四信五品抄講義, p. 386）

そして大聖人の一念三千とは、南無妙法蓮華經それ自体である。この証拠は本尊問答抄にある。「藥王在在處處に若しは説き若しは読み若しは誦し若しは書き若しは經卷所住の處には皆応に七宝の塔を起てて極めて高広嚴飾なら令むべし復舍利を安んずることを須いじ所以は何ん此の中には已に如来の全身有す」

この御文の意味は極めてシンプルで、宝塔を以て本尊とすべきであり、釈迦の仏像を造立する必要はない、なぜならこの宝塔の中に如来の全身がおられるからである、ということである。そしてこの宝塔の中におられる如来とは釈迦ではない。なぜなら釈迦の場合は同御書の法勝人劣の原理に背くからである。

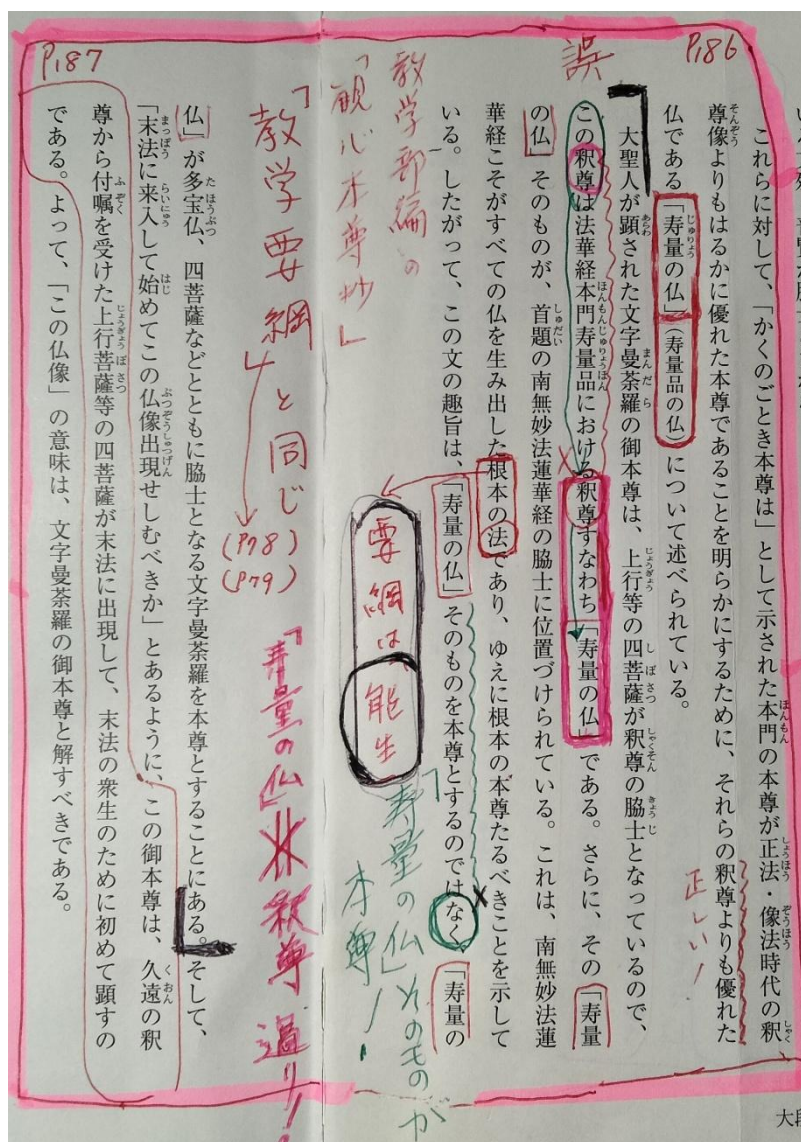
一方で、大聖人を供養する功德は釈迦を供養する功德よりも百千万億倍勝ので、法勝人劣の原理は生じない。従って、宝塔（南無妙法蓮華經）の中におわす如来とは大聖人のことである。そしてこの如来こそが、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」報恩抄、と説かれた御文の教主釈尊のことを示しているのである。

文底の釈尊を大聖人とする思想は既に日興上人の直弟子である三位日順に存在しており、これを単なる単法本尊とすることは、日興門流から逸脱した大きな謗法となろう。「この日本国は久成の上行菩薩の顕れ玉うべきなり。しかるに天竺の仏は迹仏なり、今日本国に顕れ玉うべき釈迦は本仏なり。彼の本仏の顕し玉ふ所なれば日本を中国と云ふなり。」（日順雜集『富士宗学要集』第2巻, p.113）　と。

（私見）上記、中村氏の論考は、まさに、正論と拝します！

私は、2024年版186、187頁での御本尊の相貌への記述「寿量の仏」が「教学要綱」と同じ「釈尊」であり、これは日寛上人、戸田・池田両先生が明確に「日蓮大聖人」とされたご指導に完全に違背、突然、身延派日蓮集と同じであると11.18拙文 <https://share.google/gNKItN0iBMtlFf1pt> 106 頁の5と116～123頁で論証しました。また、11.28拙文 <https://share.google/khPgHR1NgRYNnddGo> 14頁では2018年版との比較も以下のように記しました。再掲載します。

—2018年版は、明らかに寿量の仏を大聖人としていて、極めてまっとうです。しかしその5年後2023年に、「教学要綱」が寿量の仏=釈尊と記すと、その半年後、2024年5月3日発刊の教学部編観心本尊抄の同じ186頁では、以下のよう、「教学要綱」と同じ寿量の仏=釈尊なのです！



これは、まさしく「日蓮がたましひ」御本尊様の相貌について、教義変更をしているのです！

創価学会が、こんなデタラメを会員にして騙しては、宗教団体として自殺行為であると断じます！

また、何と昨年末に実施の青年部1級試験では、「寿量の仏」=釈尊とする、この教学部編観心本尊抄が教材だったのです！青年部を騙すな！です。一と。



上記、2018年版から2024年版への削除、変更を、A氏、イタリアのB氏、中村誠氏に報告、3氏から以下、感想を頂きました。

A氏は一図斉さんよくぞ精読して、相違点を炙り出して頂きました。2024年版観心本尊抄は本年の青年教学1級試験の課題教材でした。私の娘たちも受験しました。受験者はおろか、講義担当者も気付かない内に、姑息に内容を改竄するのは、卑怯な畜生根性の現れです。本当に呆れ返ります。STBで放映された1級試験用の講義では、「教材としては、最新のこの教本を指定していますが、過去版でも結構です」と言い放っていたのを思い出します。確かに御指摘の箇所は、講義で深く解説することもなければ、試験問題としても出題されていません。過去問演習ドリルには、五重三段に展開して説明する問題が頻出問題として取り上げられていたのですが、現役の青年部世代は五重の相対を体系的に学んでいないので、ちんぷんかんぷん。私の娘たちも、ここはどうしても分からないと言っていました。試験直前だったので、正解を丸暗記するのも無意味と考え、他の設問で着実に点を稼ぐべく割愛しました。試験会場から帰ってきた彼女たちが、「あの問題で出たよ」と報告があった時には、五重の相対も教えずに、よくも事務的に過去問を惰性で出題したものだ、と呆れました。事前勉強に相当時間を費やし、学習担当者の好意で別途五重の相対を学んでいないと、理解して解けない問題です。娘たちは、当該設問はスキップした様ですが、他を確実に解いたので合格はできましたが、複雑な心境です。現在の青年部1級資格者の教学习熟度はこの程度であることを前提に、任用受験者に話すが如く御書と日蓮仏法の奥義を粘り強く伝えて行かないと、創価新報に登場する男子部教学室の様な底の浅い法論しか出来ない烏合の衆を排出するだけという悲惨な現状を打破できません。—と。 \*\*\*

B氏は一わざわざ「釈尊と等しい仏の境涯」と書き換えていますね。釈尊にこだわるこの執心が謗法ですね。身延山久遠寺の本尊を思い出しました。実に豪華絢爛です。ネットで検索すると沢山出てきますよ。添付、見て下さい。江戸時代の寺請制度で檀家から上がる御供養で潤った葬式仏教の姿を見事に見せてくれています。さらに今、池上本門寺の非常に面白い資料を見つけました。これです。池上本門寺歴史探検 <https://honmonji.jp/read/rekishitanken02.html> これ、まさに「教学要綱」の本尊観とほぼ同じですね。題目の脇士に金ぴかの釈尊と多宝如来が来て、その脇士に4菩薩が来るというものです。一方で戸田・池田先生の教えというのは、題目の脇士の釈迦・多宝は、大聖人の己心の仏界を顕すもので、現実世界の釈迦がここにきているわけではないということです。五老僧門流の本尊と比較することで、「教学要綱」の邪義がより鮮明になると思います。—と。



(私見) B氏の指摘通りです。  
2024年版観心本尊抄 302 頁に—  
「本門の釈尊を脇土となす」(新 146  
頁)とは、御本尊中央の「南無妙法蓮  
華經 日蓮」の首題の左右に釈迦牟  
尼仏・多宝如来が認められていること  
を指す。諸宗の仏を統合する法華經  
本門の教主・釈尊をも脇土とする本尊

は、未曾有であり、一閻浮提第一の本尊となる。—と。この表現は「教学要綱」と基調が同じであり、上の身延山久遠寺の本尊と同様としか思えません。つまり、2024年版の観心本尊抄の底意は釈迦本仏論なのです！

\*\*\*

また、中村誠氏は一なるほど、これは酷いですね。破折ですが、法華經の智慧の次の箇所を引用すればよいかと思います。究極の仏の形態とは金ぴかの仏にあらず、菩薩仏であるという議論です。—「では永遠の仏を説くにはどうすれば良いか」というと、『仏因』に『仏果』を認めなくてはならない」(『法華經の智慧』第5巻 p. 212)。「この「因位(仏因の位)の仏」——それが上行菩薩です。『因果俱時の仏』です。上行菩薩が出現しなかったならば、無始無終の本仏は示せないのです」(同書 p. 212-213)。

補足で次の池田先生のスピーチも引用するとさらに強力で、矛盾が露呈します。「日蓮大聖人は、末法の御本仏であられる。釈尊、三世十方の仏・菩薩をも引き従えていく身であられる」(池田全集 88 巻, p297)そして、究極の仏の形態は金ぴかの仏ではないという議論ですが、事実、御衣並単衣御書では三十二相を備えた仏を否定し、法華經の文字という仏こそが真の仏であると説いています。「応化非真仏と申して三十二相八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給いて仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人は無一不成仏如来の金言なり」それでは「法華經の文字という仏」とは一体どのような仏なのか。一番簡単な議論はこうです。

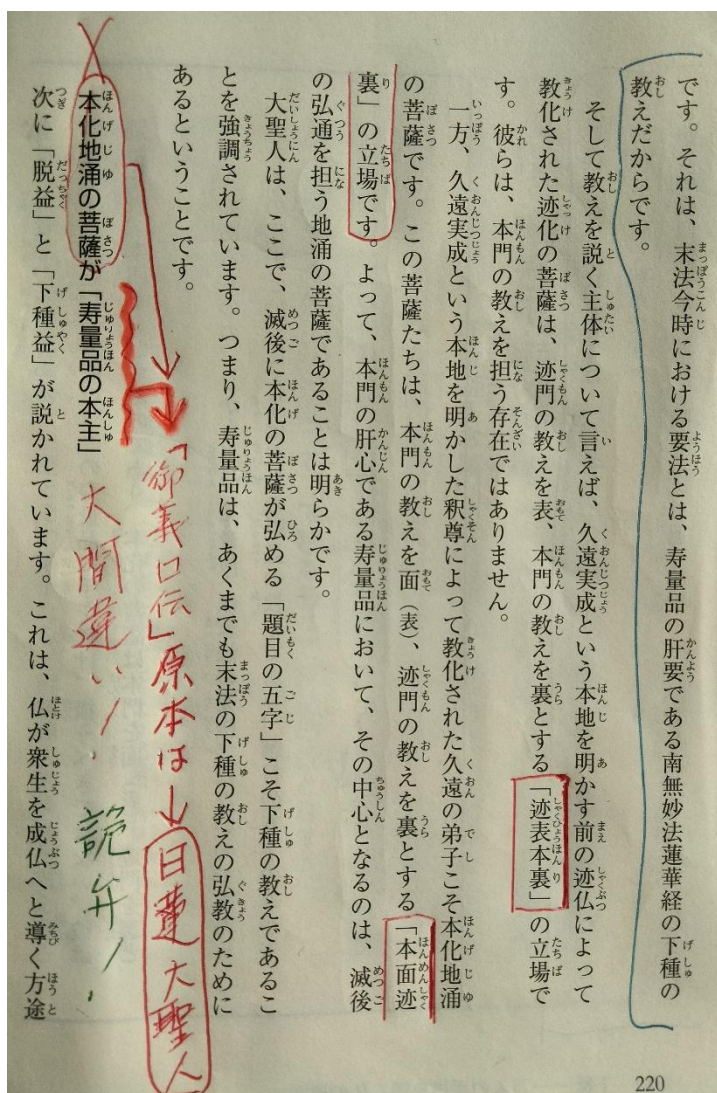
「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」経王殿御返事。なお、この御書を真筆がないから信頼置けない御書として排斥する大崎ルールは論外で、池田先生の議論などではありません。—と。

(私見) 三方の感想、ご指摘、全くその通りと拝します！ 22/30

私は 11.18 拙文 <https://share.google/gNKItN0iBMtlFf1pt> の 83 頁から 97 頁で、



池田先生の「御義口伝講義」原本と、この「御義口伝要文」の文上解釈 15ヶ所他を抽出、記し置きましたが、要文 220、221 頁が先生の「御義口伝講義下」64 頁にご指導の「**迹表本裏・本面迹裏**」を、ごまかしていることまで記さなかったの  
で、ここに記し置きます。



そして、この邪義を 2024 年版観心本尊抄にも、そのまま転用しているのです。さらに、それが昨年 12 月 8 日実施の青年部一級教学試験の主教材になっているのです！こんな邪義を未来ある青年部に刷り込んだのです！

要文 220、221 頁は、狡猾極まりない語句並べのごまかし文なのです！最後まで地涌の菩薩の先駆けが日蓮とするのです。種脱相对を完全に無視なのです。

青年部一級教学試験は、ここ何年間も開目抄が教材から外され、五重の相对も無視、観心本尊抄も偽りの種脱相对であり、種脱相对の言葉さえ出さない苦し紛れの作文なのです！

池田先生の「御義口伝講義」は、「**寿量品の本主**」は日蓮大聖人なのです。  
(本稿 25 頁に掲示) 観心本尊抄が、終始、地涌の菩薩とするのは「教学要綱」と同じなのです。



## → 大聖人と菩薩止利!

に、下種・調熟・得脱の3段階があることを踏まえた表現です(注12)。釈尊の仏法は、過去世に仏に結縁し下種を受け、調熟された衆生を得脱させる教え、つまり脱益の仏法です。

しかし、末法の衆生は、そうした過去世の結縁がないため、下種の教えが必要であり、それが南無妙法蓮華經の大法なのです。地涌の菩薩は、仏に代わって末法において題目

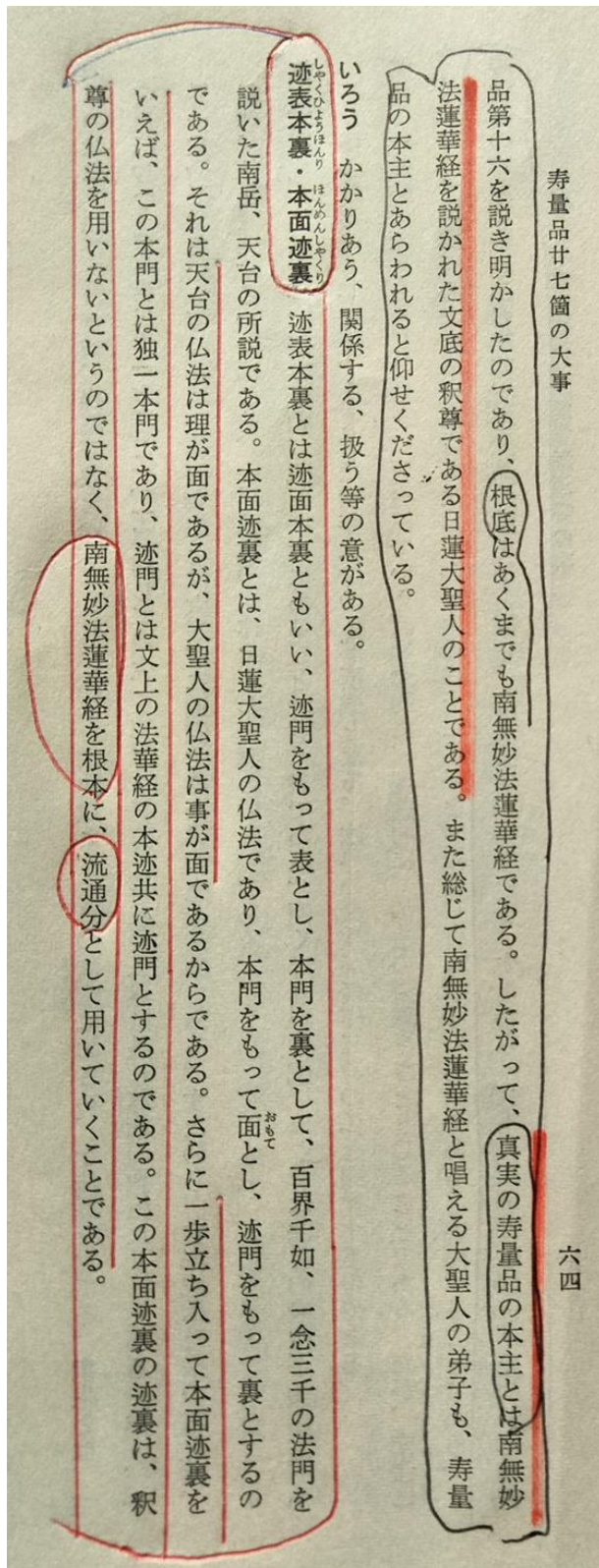
を直ちに下種していく主体、主人公であり、「寿命品の本主」にはかなりません。そして、その「地涌の菩薩のさきがけ」(新1790頁・全1359頁)として、不惜身命の大闘争を貫き、妙法を弘められたのが大聖人です。日蓮仏法は、下種益の仏法です。下種によって、本来ある仏性が発動するのです。

さらに大聖人は、「日蓮等の類」と仰せの通り、門下たちも「寿命品の本主」とし、妙法を語り広げゆく主体としての崇高な使命を担っていることを宣言されました。その意味では、「さきがけ」を果たされた大聖人に二陣、三陣と続いて、妙法を下種しゆく地涌の菩薩たちが次々に出現しなければ、御義口伝は完結しないと言えましょう。

下種——万人の幸福を開く仏の聖業

釈尊が  
至人!





池田先生は「御義口伝講義下」64頁で左のようにご指導なのです！それに全く違背なのが、「御義口伝要文」なのです！

また、戸田先生も以下ご指導です。（戸田城聖全集第7巻259頁）—今日、邪宗の諸門流は末法いまは本門の時なりと仰せある大聖人の御言葉を取り違えて、本面迹裏と称して法華經本門の十四品を面とし、法華經迹門の十四品を裏となしているのである。じつにこれはうかつなことであって、脱益文上のみを知って文底下種を知らないのである。

大聖人の御聖意は法華經文上脱益の本迹二門を迹として、文底下種の妙法を本とするのである。そのゆえに天台および邪宗の諸門流と御聖旨とは水火である。—と。

また、中村氏より以下頂きました。—新版の観心本尊抄は上記、戸田・池田両先生のご指導、解説を曖昧にしているように思います。文底の法華經を無視して、文字通り、迹門方便品を表とした法華經＝天台の法華經、本門寿量品を表とした法華經＝大聖人の法華經、としている可能性が高いと思います。宮田氏の論文—

<http://hw001.spaags.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf> の p. 39 に、なぜそのような解釈になったかが述べられており、これを踏襲している可能性が高いと思います。

観心本尊抄には、迹門の一往、再往、本門の一往、再往、が説かれており、明らかに迹門と本門の両面の二重構造が説かれています。これが開目抄のいう文の底、あるいは文の底から想定される文の上の法華經ということです。

天台の法華經は迹門中心、大聖人の法華經は本門中心（だから文底の法華經などは存在しない）というのは、この一往、再往のところを読めていないということになります。結果として、小樽問答における身延側と全く同じ誤りを犯しています。これは宮田氏の論文、優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題、8-2-1-2 『開目抄』に示される文底の文 p. 38-39

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf> と全く同じ誤りといえます。

身延とのやりとりは、池田先生の人間革命9巻に詳細に記録されています。次の箇所は重要です。「末法においては本門は流通分として用いられることにすぎないことが、彼（身延側の長内妙義氏）の念頭には影すら浮かばなかった」（人間革命9巻、小樽問答、p. 133）「文底の南無妙法蓮華經が出現した以上、法華經の本迹は、ともに捨てるべきことは論をまたない」（『人間革命』第9巻 p. 136）従って教学要綱の—「仏のあらゆる教えが『法華經』の中にすべて包含されている」（同書 p. 31）—この記述は誤りです。—と。

（私見）中村氏の指摘は深く、本質的です。全くその通りと拝します。また、以下、流通分について、ご参考下さい。

るつうぶん【流通分】「るすうぶん」とも読む。流通とは流れ通わすことで、流通の義をもって説かれた教説の部分という。經を釈する場合、一部を序・正・流通の三段に分けて内容を展開する三分科經の一つ。流通分とは、既に説かれた教えの中心的部分（正宗分）を将来弘通させる意図をもって經の終わりに説かれたもの。日蓮大聖人は、文底下種仏法の立場より、序正流通の三段を五重に立て分け、一切の教えの勝劣を判じられている。その五重三段の各重の流通分を述べれば、第一に、釈尊の一代聖教の流通分は法華經流通のために一日一夜で説かれた涅槃經。第二に、法華經十卷（無量義經一卷、法華經八卷、普賢經一卷）の流通分は滅後の修行を説いた分別功德品第十七の後半品より普賢菩薩勸発品第二十八までの十一品半と結經の觀普賢菩薩行法經。第三に、法華經迹門の流通分は滅後の弘法者の達難を説いた法師品第十より安樂行品第十四までの五品。第四に、法華經本門の流通分は滅後末法のための説法である分別功德品第十七の後半品より結經の觀普賢菩薩行法經まで。第五に、文底下種の南無妙法蓮華經が顕れおれば、釈尊一代聖教のみならず十方三世の諸仏の微塵の經々の体内の辺はすべて流通分となる。すなわち、一切諸仏所生の南無妙法蓮華經の一法が根源の法であることが明かされ、諸の教えが開会のうでで用いられる時、すべての教えは南無妙法蓮華經の流通分となる。曾谷入道殿許御書には「此の大法を弘通せしむる法には必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし」（一〇三八頁）と述べられている。御書 観心本尊抄（二四八頁）四信五品抄（三三八頁）

さらに、池田先生の「百六箇抄」講義 序文 設計図 を拝しました。  
釈迦仏法に遥かに勝る独一本門

戸田先生はよく迹門の理は家の設計図に、本門の事を家それ自体にたとえられて、わかりやすく説明されましたが、迹門はあくまで、作々発々と振る舞う生命自体を設計図として描いたものにすぎない。設計図はどこまでも設計図です。どんなに精密な設計図を幾枚重ねても、遂に生命そのものとはならないでしょう。(中略)

本仏の生命に触れることが大事

また、釈迦仏法には、三千塵点劫、五百塵点劫という長遠な過去にさかのぼり、そこに深遠な哲理が秘められているかのごとく、精密な理論を展開していますが、やはり一幅の設計図にすぎず、本源の生命そのものを指し示すための手段なのであります。(中略)

日蓮大聖人は、三千塵点劫、五百塵点劫という一時点を想定する幻想の過去をたたき破って「久遠元初」「久遠即末法」「久末一同」と説かれたのであります。今、ここに、鼓動し、律動し持続しつつある生命それ自体を凝視し、久遠より流れる法と力を見だし、そこに一切の淵源があると喝破されたのであります。「久遠即末法」とは、大御本尊即日蓮大聖人の御命のことであります。大聖人の命そのものが久遠元初であり、もったいなくも、御本尊に南無して唱題する私たちの生命もまた久遠元初に生きていくのであります。「観心本尊抄文段」には「我等この本尊を信受し南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」と述べられているとおりであります。(中略)

大聖人は成仏の根本因を植える仏 本因妙の教主

本因妙の教主とは、本因妙の仏法を説く仏であり、久遠元初の自受用報身如来即日蓮大聖人である。日蓮大聖人を本因妙の教主と呼ぶ理由は、次の文底秘沈の問答のなかに明瞭に記されています。「文底秘沈抄」には「問うて云く教主とは応に釈尊に限るべし、何ぞ蓮祖を以て教主と称すや。答う釈尊は乃ち是れ熟脱の教主なり、蓮祖即ち是れ下種の教主なり。故に本因妙の教主と名ずくるなり」とあります。(中略)

久遠元初自受用報身の再誕としての日蓮大聖人こそ、本果妙の教主・釈尊の仏法を遥かに越える本因妙の大仏法を説示する本仏であり、末法万年の衆生を救済できる教主なのです。一と。



私は、「教学要綱」が一日蓮大聖人は、単に釈尊から託された『南無妙法蓮華經』を弘める菩薩である（91頁）—と記し、また、教学部編の「観心本尊抄2024年版」が一本抄執筆の当時こそ、地涌の菩薩が出現して本門の本尊を顕わす時であると述べ、日蓮大聖人こそが、地涌の菩薩の振る舞いをされていることを示される。（中略）仏（久遠の釈尊）が大慈悲を起こして、この一念三千の珠を妙法五字に包み、地涌の菩薩を使いとして、末法の未熟な凡夫の首に懸けさせるのである。（13，14頁）—と記すことは、両書が釈迦本仏論であり、**池田先生の「法華經の智慧」**（第4巻56～58頁）の下記ご指導に完全に違背すると断言します。

—**釈尊の師は南無妙法蓮華經如来**

**池田** 法と人（仏）は本来、不可分なのです。「如来」というのも「如（真如・真実の世界）からやって来たもの」ということです。すなわち「如来」とは、真実の「法」が現実の上に表れたのです。宇宙生命に“人”の側面と“法”の側面があり、それが一体なのです。（中略）

寿量品では、永遠なる「常住此説法（常に此に住して法を説く）」（法華經四八九ページ）の仏身を説く。文上の法華經では、五百塵点劫以来の「久遠実成の釈尊」のことだが、その指向しているのは無始無終の「久遠元初の仏」です。釈尊が悟った「永遠の法」即「永遠の仏」は、あらゆる仏が悟った「永遠の大生命」であった。過去・現在・未来のあらゆる仏は、ことごとく釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟ったのです。

それが久遠元初の自受用身であり、南無妙法蓮華經如来です。戸田先生は言われた。「日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのです。これを久遠元初といいます。始めもなければ、終わりもないのです。大宇宙それ自体が、大生命体なのです」と。無始無終で慈悲の活動を続ける、その大生命体を「師」として、「人間・釈尊」は人間のまま仏となったのです。そして、悟ったとたん、三世十方の諸仏は皆、この**人法一箇の「永遠の仏」を師**として仏になったのだとわかったのです。—と。

\*\*\*\*\*

以上、結論、2024年版「観心本尊抄」がどれほど戸田・池田両先生の本当のご指導に違背しているかを論証しました。こんな邪義を教材にした昨年の12月8日実施の青年部一級教学試験が、どれほど若き青年部を騙したか！  
私は、ここに記し置きます！



なお、本拙文では、公開されている文献の比較に基づき、一部の記述について学術的に検討すべき点が残されているように見える箇所を指摘しました。ただし、これらは著者（図齊）による資料比較に基づく“疑義”であり、正式な判断は専門分野の研究者・研究機関に委ねられるべきものであると思っています。簡易的なチェックとしては、近年一般化している AI による文献比較ツールを用いる方法も選択肢となりえます。本拙文の指摘箇所について、読者自身が適宜確認されることを推奨致します。

私見、日蓮大聖人様が人本尊開頭の書「開目抄」のすぐ後に、「開目抄」の重要義、本義を踏まえて記された法本尊開頭の書「観心本尊抄」こそが、日蓮本仏論の大宣言書であり、御本尊様の相貌を宣言された最重要の御書なのです。それを現教学部は釈迦本仏論にして青年部教学1級試験で教材にしたことがどれほど酷いかことか。そして、純粋な学会員を騙していること、宗教団体の根幹である教義を改竄している現教学部を許す訳にはいかないのです！

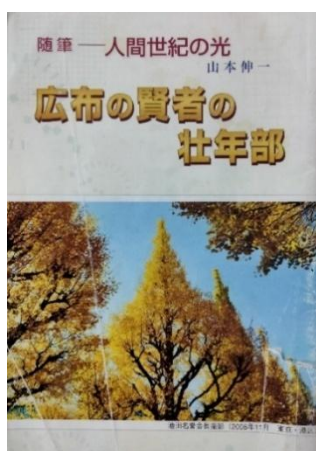
また、2024年版観心本尊抄第2版が「教学要綱」の発刊後すぐに、第1版の重要義を削除、改竄されたことに付き、友人C氏より下記頂きました。—「教学要綱は」「一大秘法」を「本門の本尊」から「南無妙法蓮華經の題目」に改変しました。法宝もまた然りです。このひとつだけ取っても、何もかも変わってしまいます。全く別の「宗派」になってしまいます。日本国の憲法を「主権在民」から「主権在天皇」に変えてしまうようなものです。この国の精神も、向かう方向も、あらゆる「在り様」が変わって、全く別の国になってしまいます。たった一言変えただけで…。これは、あまりにも酷いと思います。酷すぎます。—と。全く同感です。

私は、毎日3時間唱題に挑戦、日蓮大聖人様から日蓮仏法の虚偽、違背とは厳然と戦いなさい！との御下命を拝しております。また、師匠池田先生の本当のご指導を削除、改竄する一切の魔の所為に対し、池田門下生として、これを許すことは絶対にできません。もし日蓮仏法の本義、真義、そして、池田先生の本当のご指導について我見、間違ったことを記せば、それは日蓮大聖人様、即ち、御本尊様からお叱りを受けます。仏罰を受けます。

青年部の皆様、この拙文に記した通り、現在の学会教学は「教学要綱」の一創価学会は永遠に、「御書根本」「日蓮大聖人直結」の指針のもと、三代会長の指導のままに、「実践の教学」の大道を貫いていきます（5頁）—との言質に反し、池田先生の本当のご指導に全く違背していることは、上述の通り誰の目にも明らかなのです。

どうか、賢明なる皆様、若き英知と求道心で、本当の日蓮仏法と、池田先生のご指導を学んで下さい。拝読すべきは池田先生が直筆された「御義口伝講義」、「百六箇抄」の講義、「法華経方便品・寿量品講義」そして、鼎談「法華経の智慧」です。

私には、何の他意ありません。ただただ、未来ある創価の青年部の皆様が本当の日蓮仏法を拝し、歓喜、感動に燃えて進まれることを心より祈るばかりでございます。最後に、池田先生の下記ご指導を拝します。僭越ながら、私の今の思いでございます。



銀杏の葉は、この愛読書とともに、常に私の座右にあった。  
銀杏の原産地は中国だ。「公孫樹」（いちよう）と書かれる場合もある。  
そこには、自らが植えた銀杏の実を収穫するのは、孫の代になるという意義が込められていたようだ。  
かつて読んだ、その話が、今でも深く、私の心に残っている。  
「公孫樹」——その名は、自分のためではなく、未来の世代のために生き抜くのだ！  
わが生命力を発揮して、歴史をつくるのだ！と語りかけているような気がしてならない。

この拙文を親しき友人にもお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご高見、ご指導を、[kiroi bara.526@gmail.com](mailto:kiroi bara.526@gmail.com) にお問い合わせ申し上げます。

敬具 図斉修